

令和元年度(2019年度)

北海道高等学校教育研究会商業部会研究集会

発 表 資 料

大テーマ「特色ある教育実践（キャリア教育）」

発表テーマ「下川商業高校における商業教育」

～保護者・地域・卒業生とともに～

学 校 名 北海道下川商業高等学校

発 表 者 橋本知尋

日 時 令和2年1月9日(木)

1 はじめに

(1) 下川町の概要

下川商業高校の位置する下川町の人口は約3,300人である。1986年に「手作り観光日本一」を目指し、15年の歳月をかけ、町内外延べ14万人の手により石を積み上げ万里長城を築城し、その記念として毎年5月に「万里長城祭」を実施している。また手延べうどんが名産であり8月下旬に「うどん祭り」を開催している。自然を生かした「アイスクャンドルミュージアム」や「植樹祭」など数々の町おこし事業が盛んである。産業は農業（酪農）・林業の第1次産業が中心である。



「おいでよ。森林と人が輝くしまかわ」

このキャッチフレーズに象徴されるように、町の90%が森林で、昭和28年に国有林1,221㌔取得、以後機会があるごとに国有林などを取得しながら、植林50㌔×伐採60年の循環型森林経営システムを構築している。国は地球温暖化問題への対応として世界の先例となる低炭素社会への転換を進めている。より大幅な温室効果ガスを削減する目標を掲げ、先駆的な取り組みにチャレンジする都市を「環境モデル都市」として選定し、平成22年7月、下川町がその1つとして認定された。また国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）と下川町が掲げる取り組みが合致しており、「SDGs未来都市」にも選定されている。特産品は、下川町産小麦のはるゆたかを使用した手延べうどん、トマト、しいたけ、アスパラ。スキーのジャンプ競技の聖地としても知られている。

下川町は下川商業高校に対して多くの支援・援助を行っている。入学準備金12万円の支給、通学費の半額助成、検定受験料の補助、町運営寮の利用料無料化、部活動遠征費の補助、寮生の帰省旅費補助など幅広く、入学から卒業まで安心して在学できる教育環境を提供している。

(2) 学校概要

本校は、昭和23年に北海道名寄農業高等学校下川分校として認可され、昭和48年に商業単置校となり現在に至っており、商業科1間口である。年々生徒数が減少していたが、平成29年度の生徒募集で定員を超える出願数があり、現在全校生徒86名である。平成22年度からは士別翔雲高校の地域連携キャンパス校（今年度から地域連携特例校として改称）となっている。

学力層は基礎学力の定着を目指す者から国公立大学を希望する者、全商検定9種目取得を達成する者まで幅広く、また、部活動も盛んで、スキー部がノルディックスキー競技で毎年世界大会に出場し活躍している他、バスケットボール部、剣道部、陸上競技部、ソフトテニス部、女子バレーボール部は全道大会に出場、商業研究部は、簿記コンクールにおいて全国大会出場（個人）を果たしている。

(3) 校訓

「自律」

(4) 学校教育目標

- ①健康で創造力豊かな人を育てる
- ②明朗で協調性に富む人を育てる
- ③誠実で実践力溢れる人を育てる



校章



全校生徒（学校祭）

(5) 重点目標

- ①基礎学力の定着を図り、自ら学ぶ意欲を育てる。
- ②自らを律する心を育て、礼節を重んずる生活習慣の確立を図る。
- ③自らを鍛え、健康で豊かな思いやりのある社会人の資質を育てる。

(6) 学校規模

全日制 商業科 1間口3学級

(7) 教職員数 17名 平均年齢41.6歳 (令和2年3月31日現在)

区分	校長	教頭	教諭	養護教諭	実習助手	事務職員	合計
人	1	1	10	1	1	3	17

(8) 生徒の状況

①在籍状況 (令和元年5月1日現在)

学科/学年		1年		2年		3年		合計	
商業科	男	11	31	6	14	25	41	42	86
	女	20		8		16		44	

②出身中学校

	下川	名寄	名寄東	風連	その他	合計
1年	11	9	6	2	3	31
2年	7	3	4	0	0	14
3年	14	7	10	2	8	41
合計	32	19	20	4	11	86



③部活動 実加入者 81名 (加入率94.2%) 兼部生徒もいるため実加入者数字とは異なる

	女子バレー	ソフトテニス	陸上	男子バスケット	スキー	剣道	商業研究	吹奏楽	料理研究	写真
1年	6	8	1	2	3	1	5	2	2	3
2年	2	6	2	1	0	0	0	0	1	0
3年	1	6	4	8	6	3	2	0	3	3
合計	9	20	7	11	9	4	7	2	6	6

④進路状況 (平成30年度卒業生)

進路		男子	女子	合計
就職		5	9	14
進学	大学・短大	1	3	4
	専門・専修学校	2	4	6
卒業生総数		8	16	24

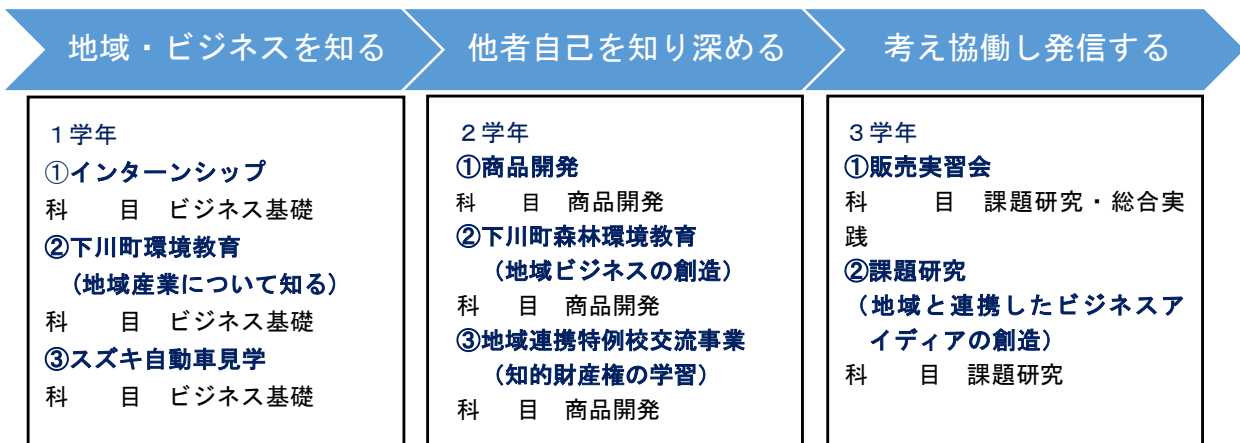


2 体験的・系統的な取組

(1) 学年ごとの商業教育とキャリア教育のながれ

本校では3年間にわたる体系的な学習を取り入れている。平成元年から続く販売実習会をその集大成に見据え、1年生ではインターンシップや町内企業見学を実施し、地域の人や産業を知り、あるべき勤労観・就労観を養い自己理解を進めている。2年生では商品開発において地域産業との取り組みと他校との交流により、知識を深め、他者（地域）との共存における自己の在り方について考えを深めている。3年生では販売実習会においてそれまでに身に付けた知識や技能、思考・判断力を最大限に活用し、地元特産品の仕入から販売までの活動を行う。そこでは様々な課題を発見・立案し、生徒同士や関係者と協働して主体的に解決する活動となっており、時に自分の失敗を認めながら成功に向けて努力する姿勢を醸成している。その中で、生徒は自分の置かれている状況や役割を受け止めながら、自分の可能性を含め肯定的に自分を評価・理解し、将来の自己の在り方・生き方を考えていく。また、これらの学習の中で、生徒は多くの地域企業や諸団体や卒業生とつながり、密接に関わりを持つことで、学校内で行われる学習が補完され、身に付けた知識や情報が自身を取り巻く現実と線をつなぎ、新たな発見や、より自分事とした主体的な考えや行動につながっている。

現学習指導要領では「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することが出来るよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」と明示されている。本校では、中央教育審議会で示された社会的・職業的自立の基盤となる4つの能力（人間関係形成・社会形成能力・自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の視点でも商業教育を捉え、現状を見つめなおし、より充実した取組になるよう再編の時を迎えている。



商業科内で行われるキャリア教育「現状分析シート」 ※出典：北海道教育委員会「キャリア教育分析シート」を参考として作成

各学年（教科内）のキャリア教育の取組				基礎的・汎用的能力の内容				論理的思考力、創造力	意欲・態度	勤労観・職業観等の価値観
学年	説明番号	取組名	概要	①	②	③	④			
1 学年	3-(1)	インターンシップ	地元企業で3日間の職場体験学習	○	○		◎			○
	3-(2)	森林学習	NPO法人協力による地域資源の学習	○		○		○		
	3-(3)	スズキ(株)自動車テストコース見学	企業誘致から見る地域存続と企業理解			○	○	○		○
2 学年	3-(4)	商品開発	起業家意識の向上と発想創造力の涵養	○		◎				○
	3-(5)	地域連携特例校として取組	知的財産権の保護と活用能力の育成	◎					○	○
3 学年	3-(6)	販売実習会	地域連携による実践的総合学習	◎	◎	◎	○	○	○	○
	3-(7)	科目「課題研究」の取組	地域発展を目指した調査・研究			◎	○	○		
	4-(1)	うどん教室	高校生の手で郷土愛を育む指導者教育	◎	◎		○			○
社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力			基礎的・汎用的能力の内容	①人間関係形成能力・社会形成能力 ②自己理解・自己管理能力 ③課題対応能力 ④キャリアプランニング能力						
			論理的思考力、創造力							
			意欲・態度							
			勤労観・職業観等の価値観							

3 地域と連携した各取組の詳細

(1) インターンシップ

【ねらい】

- ア 地域と連携した体験的学習の充実。
- イ 働くことの意義の考察。接遇・マナーの実践。
- ウ 地域の文化・産業・経済の理解。
- エ 将来の生き方や進路実現に向けての考察。

【内容】

9月初旬に、下川町および名寄市の企業にて3日間の就業体験を実施。販売業を中心に役場や消防署などの公的機関、福祉施設、保育園等で実習を行う。

【成果】

- ア 実社会での経験により、生徒自身の存在意義を確認し、社会の一員としての自覚ができる。
- イ 働くことの意義について考えが深まり、正しい就労観や勤労観に触れることができる。
- ウ 大人との対話から、仕事上のコミュニケーション（挨拶・マナー・気遣い）を意識して行うことができ、自らが考え主体的に行動する力を身につけることができる。
- エ 学んだ接客七大用語を販売実習会で生かすことができる。



(2) 町内NPO法人（森の生活）との連携教育

1年生と2年生は、上川北部森林管理署、下川町森林商工振興課の協力のもと、NPO法人「森の生活」（下川町から委託された、森林環境都市作りを行っている団体）の方を講師に招き、森林の循環システムや森林の保全の方法について学んでいる。



① 森林学習（1学年）年2回

【ねらい】

- ア 1回目：森林の経済的価値についての理解と、森林や林業に関わる仕事の理解。
- イ 2回目：森づくりや森林資源の利活用法についての理解。

【内容】

- ア 1回目：6月に実施。下川の基幹産業である林業を焦点にあて、下川の産業・経済・職業のつながりから、下川町と生徒自身の将来について考える。2時間の講義とグループ作業形式で学ぶ。
- イ 2回目：10月実施。下川町が実施する循環型森林経営について触れる。枝打ち作業に参加し、その枝を利活用した町内のバイオマスエネルギー施設を見学。この学習は地域連携校の取り組みとして、士別翔雲高校とともに学習している。

【成果】

- ア 1回目：職業体験実施に向けて取り組まれており、地域産業の意識付けがなされる。（実際に、森林管理署や林業に関する町内企業で職業体験を実施した生徒がいる。）
- イ 2回目：世界最先端のエネルギー循環システムを学ぶことができ、持続可能な社会について町の方策と、課題を共有することで、先進的な地域産業への理解と、将来像を考える基盤ができる。



② 森林学習（2年生）

【ねらい】

ア 地域資源を題材とした下川の経済活動の考察。

【内容】

6月に下川町内の循環型林業に関わる企業見学を行う。本来であれば廃棄される枝を活用し、商品化を行った企業の理念の説明を受け、地域おこし協力隊員からみた下川町の資源の魅力について学ぶ。ワークショップにより課題や新たな方策にむけて思考を行う。



【成果】

- ア 生徒自身では気付けない地域資源の魅力を知り、地域理解を深めることができる。
- イ 商品化に至るまでの苦労を実際に聞き、人・モノ・情報の関連性など、商品化プロセスおよびアイデアの思考を学ぶことができる。
- ウ ワークショップによる活動から、自分の考えと他者の考えを照らし合わせることができる。
- エ 授業形態が異なる中での発表により、自尊感情を高めることが期待できる。

（3）スズキ（株）自動車テストコース見学

【ねらい】

- ア 地域企業と連携した体験的学習の充実。
- イ 文化・産業・経済の理解。

【内容】

8月のインターシップ直前に1年生のビジネス基礎の中で実施。下川町は1997年よりスズキ株式会社にテストコースを提供している。広大な敷地を有する下川町と、寒い環境下を必要とする企業経営のマッチングの観点から、地域の存続と企業のあり方について学習している。

【成果】

- ア 自治体の企業誘致による雇用と縁故の創出について知ることで地域経済の理解ができる。
- イ 施設見学から企業の実際をより深く知ることができる。
- ウ 見学が求人結びつき、5年連続でスズキ（株）への入社につながっている。
- エ CSRを身近に感じ取ることができる。

（4）商品開発（2学年に2単位配置 現学習指導要領前から学校設定科目として設置開講）

【ねらい】

- ア 起業家意識の向上。
- イ 発想力・創造力の涵養。
- ウ 知的財産権の理解。

①知的財産権の学習

【内容】

ア 商標についての学習とデザインの考察に始まり、サンドブラスター実習（砂を吹き付けた部分が模様としてガラスに残る装置）を行い唯一無二のガラスデザインを作成している。



【成果】

- ア デザインの考察では、自己の発想を表現することで自己理解を進め、創意工夫をして自分の創造力を高めることができ、自己有用感も高めることができる。
- イ 自らの手で作品を生み出すことで、知的財産権の必要性が実感できる。
- ウ 他者のユニークな発想や表現を認め、理解しようとする心が身につく。

② うどん商品化の学習

【内容】

- ア 特産品である下川うどんの歴史背景を学び、手打ちうどんの実習を行う。
平成17年度からは地元企業協力の下、オリジナルうどんを毎年1作品制作。商品化されたうどんは、3学年次の販売実習会にて販売されている。
- イ 商品化へ向けた取り組みから生産へのプロセス、生産者の声を直接見聞し、地元根付いた学習と起業家精神の涵養を目指した実践を行っている。

【成果】

- ア 実習の中で成果物（試食）の違いから、よりよい制作方法を見つけることができる。
- イ 自ら販売する商品を製作するため、理論づけて意見を述べるができる。
- ウ 地域を見つめ、地域に根ざした学習を行うことで、郷土愛をもつことができる。
- エ 食品表示法の改正から、新たな学習や教科横断的な学習が期待できる。

③ 端材の利活用による木工製品商品化

【内容】

下川には木材加工場が点在しており、生徒が出向いて木工製品の製作を行っている。捨てるはずの端材を加工した形成材で創作している。木のカレンダーやキーホルダー、コースターカード立て等、複雑な商品ではなく、あくまで下川町の木工製品の普及活動の位置づけで行っている。制作された製品は、3学年次の販売実習会で商品として販売する。



【成果】

- ア 地域産業と自己の関わりについて考え、発想力と創造力の育成を図ることができる。
- イ 地域住民との関わりから、コミュニケーション力を向上することができる。
- ウ 創作から販売まで行うことで、商品開発の流れが理解できる。

(5) 地域連携特例校としての取組

地域連携特例校と指定されている本校では、協力校の士別翔雲高校と年4回の交流事業と遠隔システムを利用した授業を行っている。ここでは、特に本校生徒がサンドブラスターの作業方法を伝えるために、準備を念入りに行い、伝え方を熟考するため、教育効果が高いと考えられる。

【ねらい】

- ア コミュニケーション力の向上。
- イ 思考・判断・表現力の向上

【内容】

- ア 本校生徒が科目「商品開発」の中で学んだ知的財産権の学習を踏まえ、サンドブラスターによるグラスデザインづくりを士別翔雲生に指導する。

【成果】

- ア 知的財産権に関する知識と理解が深まる。
- イ 商標調査により、商標の効果や価値を体験することができる。
- ウ 事前準備の大切さ、おもてなしの心、表現力を高めることができる。

(6) 販売実習会

本校では、販売実習会を毎年5月下旬に札幌丸井今井百貨店本店前で実施しており、今年で31回を迎えた伝統のある取組である。この取組は、それまでに培った知識・技能・能力を活用する総合的な体験学習であると同時に、地域との連携を更に強めるものである。

販売実習会を行うのは3年生であるが、1年生から商業の科目を通じて基本的な流れや商品知識を学び、2年生では商品開発を行い、販売計画を立て、3年生では仕入れから、商品陳列、POP広告やポスター作り、接客販売、会計処理、報告会までを行っており、商業高校ならではの実践とおとした総合的な商業の学びとなっている。その位置づけから、保護者も期待を寄せており、当日には、大半の生徒の親が参加し、我が子の成長を見つめている。現在では保護者自身が学生のときに販売会を経験し、その子息が入学する時代となった。

「自分（保護者）と同じ経験をさせたい。」系統立った下川商業高校教育が、卒業後の生活に影響を及ぼし、社会に通用する大きな経験であることを証明している。

【ねらい】

- ア 責任感や積極的に取り組む姿勢の涵養。
- イ 仲間意識の向上。
- ウ 論理的な思考力の向上。
- エ 最後までやり遂げる力の向上。
- オ 働くことの意義に対する考えの深化。
- カ 社会での体験を通して自己有用観の醸成、課題対応能力の向上。
- キ 多様な他者の考えや立場を理解し、他者と協働して取り組む力の向上。
- ク 自分を取りまく社会生活に対して、何が出来るかを考える心の向上。
- ケ 自己の在り方、生き方への考察。



【内容】

① グループ分け（4つの部署に分かれて作業を分担する。）

- ア 総務部（生徒を統括し、販売会の方向性などを示すなど、販売会の舵取りを行う。）
- イ 特産品部（地元の山菜、うどん、トマトジュースなど地域特産品の販売担当）
- ウ まごころ商品部（地元菓子舗の商品販売、木工製品販売、障がい者支援施設商品の販売）
- エ 会計部（ポスター・チラシ・ホームページ作成、レジ担当など）

② 地域企業との協力

- ア 仕入業者との電話、FAX連絡。
- イ 仕入業者と仕入担当者の挨拶。
- ウ 仕入商品および仕入数の打ち合わせ。
- エ 商品理解のための全商品試食。
- オ 地元企業協力の下、生徒が考案した商品を具現化。



③ 障がい者支援施設 山びこ学園との交流

- ア 山びこ学園の取り組みと、利用者への理解の方法。（座学）
- イ 山びこ学園利用者の方と挨拶、触れ合い。
- ウ 山びこ学園利用者が制作した、陶器、干しいたけの商品知識を深める。

④ 協力企業 丸井今井札幌本店との作業

- ア 創作物（パンフレット・ポスター、価格表示の色、POPの形式）の許可を確認。
- イ 保健所申請にかかわるもの、その他敷地内で実施可能なものの確認。



⑤ 販売活動の探究～ロールプレイング～

- ア 1、2学年の生徒がお客役として、販売員の3学年から購入するロールプレイングを行う。日頃見せる顔とは違う先輩に圧倒されるとともに、伝統と3年生の意気込みを感じる。5～10間の実践の後、下級生と3年生両方で反省を行い課題の共有と改善を図る。

⑥ 山菜採り

- ア 下川町森林管理署の協力の下、下川町所有の山に入り1m近い天然フキを採取。主に男子生徒が入山し200kg近く収穫する。大変好評の商品で、販売日当日は毎年長蛇の列が並ぶ。

⑦ 当日の販売(10:30～18:00)

- ア 1年生から培った商業の学習を活かし、体系的に学習した全ての知識を最大限発揮する場所として、意欲的に取り組む。
- イ 保護者が山菜(フキ・アスパラ・しいたけ)の販売員として参加する。子息の成長を目の当たりにし、生徒は保護者に誠意ある接客を披露する。
- ウ 卒業した先輩方は頑張る後輩の応援のため販売時間に集まり、後輩販売の手伝いを行う。また、閉店間際には売れ残っている商品を購入してくれる。長年にわたり、卒業後も販売実習会という行事で、下川商業高校は繋がることできている。

⑧ 丸井今井札幌本店担当者より、販売員としての心構えのレクチャー

- ア 販売会の明日、丸井今井札幌本店担当者より販売員としての心構えを学ぶ。販売のプロフェッショナルから接客についての心構え、仕事の方法、販売会の講評をいただき、今後の自分の可能性について見つめる。

⑨ 帰校後の反省会

- ア 反省文の書き込みおよび反省会。(共有)
- イ 次年度に向けた改善点について資料作成。
- ウ 販売数、完売時間の整理
- エ 報告会のスライド作成

【成果】

- ア ねらいどおりの成果がほぼ得られている。

《関係協力先》令和元年度

下川町役場、森林管理署、事業協同組合、商工会、観光協会、札幌下川会、矢内菓子舗、北はるか農業協同組合、農産物加工研究所、特用林産物栽培研究所、NPO森の生活、山びこ学園、(有)だばた製麺、下川製箸(株)、あべ養鶏場、PTA、卒業生

(7) 課題研究

【ねらい】

- ア ビジネスにおける問題意識を高揚と、課題解決力の向上。
- イ 思考・判断・表現力の向上。
- ウ 他者と協働して問題に取り組む姿勢と力の向上。

【内容】

- ア 販売実習会の報告会を終えた7月より、「地域の発展を目指したビジネスアイデア」というテーマで、下川町の取組や特産品等を調査・研究し、ビジネスアイデアを提案する取組を行っている。生徒は2～3名のグループに分かれ、聞き取り調査やデータの収集による調査と仮説に基づく検証等を行い、アイデアの提案を考える。まとめとして、レポートとプレゼン資料を作成し保護者や地域の関係者を学校に招き、発表をおこなっている。今年度は、地域の商工会や観光協会の若手リーダーの協力をいただき、共にビジネスアイデアを考えていく予定である。

【成果】

- ア 生徒が地域の方々と協働して課題解決にむけて取り組むことができた。
- イ 大人の知識に触れることで、豊富な方策に触れることができ、以前よりも多角的に物事を捉えることができる。



4 その他の取組

(1) うどん教室

【ねらい】

- ア 地域の小学校・中学校との連携による縦の繋がりの強化。
- イ 自主性と主体性の涵養。
- ウ 自己有用感、思いやりの心の向上。

① うどん教室（小学生）本校3年生⇒小学5年生へ

【内容】

- ア 5月に実施。小学生が本校に来校し、本校オリジナルうどんと市販のうどんを食べ比べし、オリジナル商品の存在意義について学ぶ。
- イ 本校生徒は3年生が対応。授業案は販売会総務部生徒が考案し実施する。

② うどん教室（中学生）本校2年生⇒中学2年生へ

【内容】

- ア 12月に実施。中学生が本校に来校する。中学生に対しては、うどんを中力粉から制作し、手打ちうどんの作り方を教える。プレゼンテーションにて販売会とうどんの関係性について紹介し、地域特産品を通して系統立てられた学習であること共有する。

【成果】

- ア 将来を見据えた責任ある態度を育むことができる。
- イ 高校2年生は、講師として中学生に指導するため、事前学習段階から意欲的に取り組むことができる。
- ウ 地域学習の深化が、小・中と高の連携によってなされる。
- エ 小中学生に対する対応は、多様な他者を意識した行動となり、販売会に活かされる。
- オ 中学生が抱く高校生への恐怖心などを払拭できる。地元の高校について知る機会となる。



(2) 下川町イベント参加（料理研究部・商業研究部）

【ねらい】

- ア 学校の魅力発信と生徒の活躍の場。

【内容】

- ア 観光協会主催のうどんまつり（8月）に出店し、オリジナル商品（うどん・タオル）の販売を行っている。また、料理研究部員がオリジナルうどんを使用した創作うどんの販売を行う。（200食を完売）

【成果】

- ア 自己達成感が得られ、自信をつけることができる。



(3) 学校運営協議会（コミュニティースクール（CS）の設置）

【ねらい】

- ア 地域住民や保護者との教育理念や学校課題の共有。
- イ 学校運営への支援や教育活動の協力や参画を得て、地域社会に開かれた教育課程の実現。

【内容】

- ア より地域の声が届く学校を目指して、CSを2019年度より設置。今後は下川町内で一体ある教育となるようコーディネーターである下川町教育委員会主導のもと、小中高と連携した協議会の開催を目指す。地元から愛され信頼・魅力ある学校作りを進めている。

【成果】

- ア これからの成果に期待するところである。

(4) 公開授業週間

【ねらい】

- ア 教員の授業改善。
- イ 小・中・高の学びの繋がり確認と改善。

【内容】

- ア 11月初旬から中旬にかけ、公開授業週間を設け、保護者をはじめ地域の方が自由に授業を参観できるよう開放している。またこの時期に合わせ、下川町教育委員会が調整をとり、下川小学校、下川中学校も公開授業週間を設け、互いに授業を参観できるようにしている。

【成果】

- ア 互いの授業を参観し、指摘し合うことで教員の授業改善ができる。
- イ 小、中学校で行われている授業内容を知ること、高校で何をすべきかがわかる。

5 成果と課題（取組全体を通して）

(1) 【成果】

- ① 系統的な学習が確立されている。
- ② 地域の各機関との連携は良好。
- ③ 生徒の活動も活発で主体的に取り組めるものとなっている。

(2) 【課題】

- ① 授業内容（教育課程）の精査の必要性。基礎基本の知識理解の修得から系統的な考察が出来るようになるための学習指導、学習内容の見直しが急務。形骸化されている部分がある。
- ② ルーブリックなどの作成。育成したい資質能力を明示し、生徒がどのように力を身につけたかを客観的に評価できる対策が必要である。
- ③ 生徒は主体的に活動できているが、課題解決能力の育成が不十分である。
- ④ 森林学習において、小・中・高の段階的な学びのつながりが不明確であり、小・中で体験した内容と同じ内容を再び行っているケースも見られる。段階をおった身に付けたいことを、明確にする必要である。
- ⑤ 課題研究において、ビジネスアイデアの取組開始が8月末からとなり、時間の少なさから調査研究の深化が図られておらず、年間計画の改善が必要である。
- ⑥ 今後はコミュニティスクールを上手く活用し、学校と地域ともに無理がなく、成果を実感できるような活動を行う必要がある。

6 終わりに

本校の商業教育は保護者・地域・卒業生と学校が連携及び協働した取り組みを実践している。特に販売実習会は本校の商業教育の集大成として機能し、生徒が自信をもって取り組むことが出来ている素晴らしい学習である。また、生徒は下川町および地域企業地域人材の支援援助、これまでの先輩方の功績、下川町の代表者そして下川商業高校の将来を担う重みを意識しながら一つひとつの取り組みに対し責任を持って実践している。本校のキャリア教育は商業の根幹である「人と人とのつながり」を重視したものである。

一方で、本校の教育の中で培った長年の体系的実践的学習にだけとらわれ、内容が形骸化している傾向があることも事実である。現行の授業内容を精査し、商業の基礎基本の知識理解の定着から、商業の見方考え方を踏まえ、生徒が活動できるよう工夫・改善が急務である。そこには学び続ける指導者（教員）の態度が重要である。この発表及び新しい学習指導要領施行を機に、教育課程を見つめなおすとともに、地域社会に下川商業高校のあるべき姿の創造に参画協働を働きかけながら、より生徒の資質と能力が向上し、さらに学ぶ喜びと学ぶ意義を感じる授業改善、学習体系改善・教育課程編成に努める。